

マルティン・ルターと宗教改革

宗教改革はドイツの修道士、マルティン・ルターによって始められた教会改革です。彼は1483年ドイツのアイスレーベンという町で生まれました。当初の彼は、父親の希望に従い法律家を目指しますが、落雷を受けたのを機に突如修道院に入ります。そこで厳格な修行の日々を送りながら神学研究を進めました。この時、毎日のように読んだ聖書がルターの思想に大きな影響を与えたと言えるでしょう。

さて、当時の教会(中世カトリック教会)は、世俗の栄華・権勢を追求した結果、教義が形骸化し、聖職者の腐敗も蔓延していました(当時の教皇レオ10世は、キリスト教の物語は儲かる話だと公言して憚らなかったとも言われています)。さらに、ローマのサン=ピエトロ大寺院の改築費用の名目で、贖宥状(免罪符)が販売されるようになる

「グルテン金貨が箱の中でチャリンと音を立てるやいなや 魂は天国に飛びあがるのだ」
と宣伝され、人々は罪責からの解放を求めて贖宥状を買い求めました。



人々が贖宥状を買い求める様子
(Holzschnitt 1510年)



贖宥状 (1515年)

このお金で安易に救済される状況に宗教的危機感をもったルターは、1517年に『九十五箇条の提題』を発表し、神学者たちの討論を呼びかけようとした。これが一般的に宗教改革の始まりとされています。



マルティン・ルター

教皇の贖宥によって、人間はすべての罰から放免され、救われると述べるあの贖宥説教者たちは誤っている。

『マルチン・ルター 原典による信仰と思想』徳善義和編著 リトン, 2004年
70頁より引用



九十五箇条の提題 (1517年)

『九十五箇条の提題』は、実際の討論には至りませんでした。またたく間にドイツ中に広まり、反響を呼びました。一方、ローマ・カトリック教会は、最初こそ「ドイツの田舎修道士たちのけんか」と楽観視していましたが、ドイツ国内が賛否両論渦巻く混乱状態になってくるとさすがに放置できなくなり、ルターの異端審理を開始します。1518年におこなわれた「アウグスブルク審問」では、異端審問に派遣されたカエタン枢機卿がルターに対し考えを撤回するよう説得をしますが、ルターは頑なに拒否します。

そこで、1519年ルターを異端者であることを知らしめるため、ライプツィヒ討論がおこなわれました。ここでは弁論の名手といわれた神学者ヨハネス・エックにより、ルターは徹底的に追い詰められ、公開の場で異端者の烙印を押されることになりました。窮地に立たされたルターには、自説を撤回しなければ破門するという「破門脅迫の大教勅」が発せられましたが、ルターはこの教勅を焼き捨ててしまいましたので、1521年ついに教皇から破門されます。この破門は現在も解かれていないとのこと。



ヨハネス・エック (1486-1543)

ルターの論敵といえる人物であり、1519年のライプツィヒ討論では得意の弁論でルターを追い詰め、異端者として弾劾しました。



レオ10世 (1475-1521)

サン・ピエトロ大聖堂の再建や戦争遂行などで莫大な費用を費やし、その財源確保のために聖職の増設や売却、贖宥状(免罪符)の販売を進めました。1517年、ルターから九十五箇条の提題を突きつけられますが、ルター説を排斥し1521年にルターを破門しました。

マルティン・ルターと宗教改革

カトリックから破門されたルターは、議会からも法的な保護を剥奪され、身の危険にさらされますが、フリードリヒ賢侯によりヴァルトブルク城にかくまわれます。この城でルターは執筆活動に専念します。



ヴァルトブルク城のルターの居室



Luther Bible (1534年)

この城にて、新約聖書のドイツ語訳が著されました。当時、一般に本は普及しておらず、聖書もラテン語で書かれたものがほとんどでしたので、民衆は聖書を読むことはおろか、意味を理解することもできませんでした。そこでルターは「民衆の口の中をのぞき込む」ように、彼らの言葉に即したドイツ語訳の聖書を著します。これにより、民衆は自分たちの言葉で聖書を読むことができるようになるとともに、共通ドイツ語の生成にも大きな役割を果たしました。

ルター思想が広まるにつれ、それに共感する人も出てきますが、一方で彼の思惑とは外れた事態も発生しました。

ヴィッテンベルク騒動

カールシュタットによる急進的改革。ルターがヴァルトブルク城にいる間、ヴィッテンベルクでは、カールシュタットによって改革が進められ、修道院の解体や聖画像などの破壊がおこなわれました。ルターはこれらの主張には賛同しつつも、急進的な破壊には否定的であり、彼らを「熱狂主義者」と呼んで批判しました。騒動は危険を承知でヴィッテンベルクに帰ったルターにより鎮められ、カールシュタットらは町を追われました。



カールシュタット



蜂起する農民たち

ドイツ農民戦争(1524-1525)

ルターの宗教改革に刺激されて発生した大規模な農民一揆。宗教改革の影響をうけたドイツ南西部地方の農民たちは「シュヴァーベン農民の十二箇条」を掲げ、聖書に基づく村落自治を求めて蜂起しました。指導者トーマス・ミンツァーに率いられた農民蜂起はドイツ全土に広まり領主たちを震撼させます。当初農民たちを支持する立場を表明していたルターでしたが、次第に暴徒化する農民たちに批判的になり、諸侯に一揆鎮圧を求めました。大義名分を得た諸侯たち連合軍に圧倒された一揆は、次第に鎮圧されてしまいました。

ルターの宗教改革は、個人の信仰の強調と教皇權威の媒介を否定するものでした。また、聖書は各人が読んで神の言葉を聴き取るものとされ、各国語に翻訳され普及するきっかけとなりました。この後宗教改革はヨーロッパ各地に広まり、ツヴィングリやカルヴァンなどの改革者に受け継がれます。結果的にキリスト教的な一体世界を終焉させ、プロテスタント教会を誕生させることになりました。

その他社会や文化面で与えた影響は大きく、宗教改革はまさに歴史の転換点となったと言えるでしょう。

参考文献

- ・徳善義和著『マルティン・ルター：ことばに生きた改革者』岩波書店 2012年
- ・森田安一著『図説宗教改革』河出書房新社 2010年
- ・R.W.スクリブナー、C.スコット・ディクスン [著] 『ドイツ宗教改革』岩波書店 2009年
- ・マルチン・ルター [著]；徳善義和編著『マルチン・ルター：原典による信仰と思想』リトン 2004年
- ・小泉徹著『宗教改革とその時代』山川出版社 1996年
- ・日本ルーテル神学大学ルター研究所編『ルターと宗教改革事典』教文館 1995年

※使用画像はすべてパブリックドメインです。

中世からルネサンス期のヨーロッパ文化と社会

西洋史における中世は、ローマ帝国分裂の4世紀末から、15世紀の東ローマ帝国滅亡や16世紀にかけてのルネサンスおよび宗教改革に至る時代を指します。

ルターは、中世と近代という時代の転換期を生きました。進歩史観的な立場からしばしば暗黒時代と呼ばれていた中世ですが、古代から連綿と伝えられた思想や技術と、新たな時代へと羽ばたくための知恵が融合し、新しい秩序と発展をもたらしていった時代とも言えます。

混乱と争いによる不安に救いを求めるかたちで、キリスト教が社会に広まり構築された中世初期。封建制度が確立した中世盛期。教会の腐敗とそれに対する反発が起こり、権力の中央集権化が行われ、都市と商人が台頭する新たな時代へと向かう中世後期。このように、中世のなかでも時系列により、また場所によって文化・社会の違いがあります。



リンブルグ兄弟作
「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」(15世紀)
10月



リンブルグ兄弟作
「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」(15世紀)
6月

そして芸術と科学に対する関心に加え、人間そのものに注意を向けるルネサンスという時代を迎えます。

ルネサンスの「人文主義」という考えは、世界を新たな視点で見る自由、個人の考えを表明する自由、伝統的な見解に異議を唱える自由を主張し、科学や技術の進歩と結びついた産業資本主義を掲げる近代という時代につながっていきます。

参考文献

- ・池上正太著『図解 中世の生活』新紀元社 2016年
- ・アンドリュウ・ラングリー著『中世ヨーロッパ入門』あすなろ書房 2006年
- ・アンドリュウ・ラングリー著『ルネサンス入門』あすなろ書房 2005年

※使用画像はすべてパブリックドメインです。

印刷技術の発達と宗教改革

活版印刷術を発明したヨハネス・グーテンベルクは、1455年頃に『四十二行聖書』として知られる聖書を完成させましたが、実は同じ頃、宗教改革のきっかけとなった贖宥状(免罪符)の印刷も行っていました。

印刷技術はその後各地に伝わり、贖宥状も大量に印刷され、やがてルターの登場によって、一層強く宗教改革と関わることとなります。

1517年にルターが刊行した『九十五箇条の堤題』は、「天使が運んだ」と形容されるほどのスピードで広まり、約2週間でドイツ全土に達し、1ヶ月後にはヨーロッパ中に知れ渡っていたといえます。

それから1520年までに出した出版物は、合計30万部以上売り上げたそうです。現在の日本に置き換えると約280万部となるので、人々のルターへの関心の高さが伺えます。

その後ルターは、聖書をドイツ語に翻訳しました(『ルター聖書』)。これによって一般人も聖書を読めるようになり、彼が主張した「聖書のみ(福音主義)」という原則をより推進するとともに、ドイツ語文法や表記法の統一にもつながりました。

なお、ルターの著作を含む福音主義関連書は、宗教改革が始まってから10年の間に600~700万部出回ったと言われています。



ヨハネス・グーテンベルク



『四十二行聖書』英国図書館蔵



1541年版『ルター聖書』標題紙

参考文献

- ・樺山紘一編『図説本の歴史』河出書房新社 2011年
- ・箕輪成男著『近世ヨーロッパの書籍業：印刷以前・印刷以後』出版ニュース社 2008年
- ・深井智朗著『プロテスタンティズム：宗教改革から現代政治まで』中央公論新社 2017年
- ・エリザベス・アイゼンステイン [著] 『印刷革命』みすず書房 1987年
- ・マーク・カーランスキー著『紙の世界史：歴史に突き動かされた技術』徳間書店 2016年
- ・アンドルー・ベティグリー著『印刷という革命：ルネサンスの本と日常生活』白水社 2015年

※使用画像はすべてパブリックドメインです。

キリスト教と芸術

キリスト教と芸術に密接な関係があるのは明白ですが、ルターと芸術にも深い関わりがあります。



アルブレヒト・デューラー
「自画像」



デューラー作
「死と悪魔と騎士」

北方・ドイツルネサンス絵画の大家アルブレヒト・デューラーによる『ネーデルラント旅日記』の1521年5月21日の日記には、ルターが捕まった事について「ルター哀悼文」というタイトルの長い文章が綴られています。なお、デューラーの「死と悪魔と騎士」という銅版画は、ルターに献じられたとされています。



クラナハ作の
ルターの肖像画



グリュネヴァルト作
イーゼンハイム祭壇「磔刑」

また、ルターをかくまったフリードリヒ賢明公に仕えた画家ルーカス・クラナハは、多くのルターの肖像画を描き、そのイメージを社会に浸透させていきました。

また「イーゼンハイム祭壇」で有名な画家マティアス・グリュネヴァルトの遺留品目録には、ルターの二十七の説教文が入っていました。

教会の建物を豪華に飾ることを嫌ったルターは、その代わりに音楽で礼拝を飾ることに重きを置きました。ルターは音楽を「神の賜物」と呼び、神から人間への最高の贈り物であるとし、そうして讃美歌(ドイツ語で「コラール」)が唱和され、オルガン曲が多く演奏されました。ルターは1530年10月1日付の書簡で、音楽が神学に次ぐ学芸として「心の安らぎと明るい気持ちをもたらす」と記しています。

そうしたルター派の音楽は、約200年を隔てて「音楽の父」と呼ばれるヨハン・ゼバスティアン・バッハに受け継がれました。

バッハの音楽は美しく劇的というだけでなく、ルター派音楽が繋いでいった精神をより具体的に発展させていきました。



ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

参考文献

- ・デューラー著『ネーデルラント旅日記』岩波書店 2007年
- ・新藤淳, 岩谷秋美著『ドイツ・ルネサンスの挑戦: デューラーとクラナハ』東京美術 2016年
- ・メトロポリタン美術館著『北方ルネサンス』福武書店 1991年
- ・グリュネヴァルト [画]『グリュネヴァルト: 北方ルネサンス』朝日新聞社 1996年
- ・磯山雅, 久保田慶一, 佐藤真一編著『教養としてのバッハ: 生涯・時代・音楽を学ぶ14講』アルテスパブリッシング 2012年
- ・日本キリスト教団出版局『礼拝と音楽』2017年 WINTER No.172
- ・日本共産党中央委員会『女性のひろば』2017年 4月号 No.458

※使用画像はすべてパブリックドメインです。

戦国時代～幕末

ルターによって始まった宗教改革は、ヨーロッパのみならず世界中に大きな影響を与えました。ドイツから遠く離れた日本も例外ではありません。1517年にルターによって始まった宗教改革はカトリックにも大きな影響を与え、対抗宗教改革という自己改革運動に結実しました。その主体となったのはイエズス会というカトリック修道会であり、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルもイエズス会のメンバーでした。



フランシスコ・ザビエル



踏み絵

宗教改革から約30年後の1549年、戦国時代の日本にキリスト教は伝来し、織田信長など権力者の庇護のもと布教されました。ちなみに、キリシタン大名として有名な高山右近は奈良県宇陀市榛原区沢にあった沢城にて洗礼を受けました。しかし豊臣秀吉はキリスト教弾圧に転じ、江戸幕府もキリスト教を禁止しました。厳しい弾圧の中で、キリスト教信者は隠れキリシタンとなって明治期まで信仰を伝えました。



高山右近像（高槻城跡）

参考文献

- ・五野井隆史著 『日本キリスト教史』 吉川弘文館 1990年
- ・日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 『日本キリスト教歴史大辞典』 教文館 1988年
- ・浅見雅一著 『概説キリシタン史』 慶應義塾大学出版会 2016年

宗教改革が日本に与えた影響

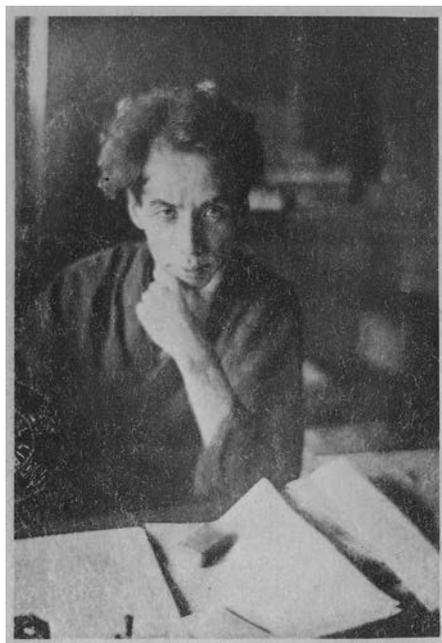
明治～現代

幕末から明治期、開国とキリスト教解禁によって日本のキリスト教は再興し、横浜や長崎でカトリックが復興するとともにプロテスタントの宣教師が来日しました。ヘボン式ローマ字考案者として有名なジェームズ・カーチス・ヘボンもプロテスタントの宣教師です。欧米の宣教師の元には日本の若者達が集まり、やがて教育者としてキリストの教えを日本中に布教することになりました。プロテスタントでは新渡戸稲造、新島襄、本田庸一などの教育者たちが特に有名です。内村鑑三は不敬事件によって教壇を

去ることになりましたが、文筆家、言論人として活動し、日露戦争では非戦論を唱えるなど日本のキリスト教徒として大きな足跡を残しました。



内村鑑三



芥川龍之介

(国立国会図書館ウェブサイト「近代日本人の肖像」より)

現在、日本国内のキリスト教徒は約300万人、総人口の1%にも満たないですが、日本の文化に大きな影響を与えています。カトリックでは、海外からも高く評価され代表作『沈黙』が2016年に映画化された遠藤周作の他、加賀乙彦や三浦朱門、曾野綾子、プロテスタントでは椎名麟三、三浦綾子などがいます。芥川龍之介「奉教人の死」「きりしとほろ上人伝」や太宰治「駆け込み訴え」など、キリスト教を主題にした小説にも名作が多くあります。

参考文献

- ・五野井隆史著 『日本キリスト教史』 吉川弘文館 1990年
- ・日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 『日本キリスト教歴史大辞典』 教文館 1988年
- ・鈴木範久著 『日本キリスト教史物語』 教文館 2001年

※「芥川龍之介」の画像は国立国会図書館に提供していただきました。その他の画像はすべてパブリックドメインです。

リンゴにまつわるエトセトラ①

“たとえ明日世界が滅亡しようとも、今日私はリンゴの木を植える”

マルティン・ルターの名言として有名な言葉ですが、実のところ本人が言ったのかどうかは謎だそうです。しかし、たとえばルーマニアの作家ビルジル・ゲオルギウが小説で使っているように、少なくとも第二次世界大戦後のヨーロッパでは、ルターという言葉として知られていたようです。

「世界の終りだ、と云っていたわ。」とマグダレナが云う。

ピラはおどおどした彼女の美しい眼を見、マルティン・ルターの言葉を思い出す。(中略)ピラは云う。

「Und wenn Morgen Weltuntergang w re, ich werde am heutige Tage doch Apfelbaumen pflanzen.」

(中略)マグダレナは地面にびたりと顔をつける。「いまなんて云ったの？」と彼女は小さな声でそっとたずねる。

ピラはドイツ語を訳しはげめる。「たとえ世界の終末が明白であっても、自分は今日リンゴの木を植える……」

～ゲオルギウ 著 谷長茂 訳『第二のチャンス』筑摩書房(1953年刊)より～

リンゴは、伝説や物語の世界で何かの象徴としてたびたび登場しますが、キリスト教との関係でまず挙げられるのは、旧約聖書に登場するエデンの園の禁断の果実(知恵の木の実)だと思えます。

実は聖書には“果実”としか書かれていないのですが、ルターの時代には一般的にリンゴを指しました。同時代の画家ルーカス・クラーナハやアルブレヒト・デューラーも、アダムとエヴァアをテーマにした作品でリンゴを描いています。また、幼子イエスが将来の使命を暗示する象徴としてリンゴを手にした作品もあります。

宗教改革によってキリスト教プロテスタントが誕生し、その信者たちは果樹園を作って神の果物であるリンゴを育てます。それはやがてオランダやイギリスなどにも伝播し、その後ヨーロッパからアメリカやオーストラリアなどに渡った入植者たちによって、各地にリンゴ農園が作られました。



ルーカス・クラーナハ
『林檎の木の下の子母』

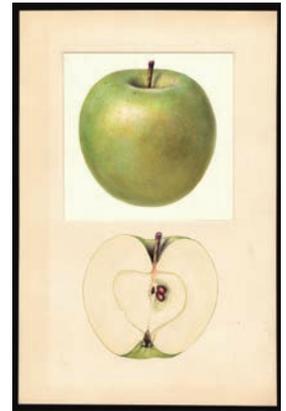


5セント切手に描かれた
ジョニー・アップルシード

リンゴが栽培されたのは、そのまま食べるためだけではなく、ヨーロッパや禁酒法以前のアメリカでは、食べるよりもむしろリンゴ酒(シードル)として飲むことのほうが多いほどでした。イギリスでは、15～16世紀にビールの需要が高まったものの、その後リンゴを重んじるプロテスタンティズムによって、シードル人気復活します。アメリカの入植地や開拓地でも、シードル作りのためにリンゴが大切にされました。19世紀初頭前後に、ジョニー・アップルシード(ジョン・チャップマン)がアメリカ中西部から北東部にかけてリンゴの種をまき伝説を残しましたが、これもシードルを広めるのが目的だったという説があります。

リンゴにまつわるエトセトラ②

時代が下るにつれ、リンゴの品種改良も次々に行われました。イギリスからオーストラリアに入植したマリア・アン・スミス婦人による新品種「グラニー・スミス」は、やがて世界各地に輸出され、最も一般的な青リンゴとなりました。ビートルズが設立したレーベル「アップル・レコード」にロゴマークとして使われている青リンゴも、この「グラニー・スミス」です。きっかけは、ポール・マッカートニーが所有していたベルギーの画家ルネ・マグリットの絵でした。リンゴの絵画といえばポール・セザンヌを思い浮かべる人が多いかもしれませんが、マグリットも青リンゴをモチーフにいくつもの作品を描いています。



グラニー・スミス



アップル社の
初期のロゴマーク

ビートルズを愛したスティーブ・ジョブズは、学生時代からオレゴン州のリンゴ農園に通い、シードル作りによく使われる品種「グラベスタイン」の手入れをしていました。そしてそのリンゴ農園からの帰りに、アップルコンピュータ(現アップル)という社名を提案します。そして同社の初期のロゴマークは、アイザック・ニュートンがリンゴの木の下に座っている絵柄でした。

ちなみに、ニュートンが重力について着想を得た逸話の残る生家のリンゴは「ケントの花」という品種で、接ぎ木によって増やされ、世界各地に植えられました。日本にも東京大学の小石川植物園に伝わり、そこから増やされた木が国内各地で育てられています。

日本に西洋リンゴが伝わったのは江戸時代末期の北海道で、やがて明治維新後の開拓時に様々な品種が植えられました。その中のひとつ「旭」は英語名を「マッキントッシュ」といい、のちにアップル社のマッキントッシュ、いわゆるMacの名前の由来となりました。このリンゴはカナダのイギリス移民2世マッキントッシュ氏による新品種ですので、やはり宗教改革からつながっていると言えるのではないのでしょうか。



横浜市こども植物園の
「ニュートンのリンゴ (ケントの花)」

参考文献

- ・エリカ・ジャニク著『リンゴの歴史』原書房 2015年
- ・マイケル・ポーラン著『欲望の植物誌：人をあやつる4つの植物』八坂書房 2003年
- ・若生祐司、和田光弘編著『歴史の場：史跡・記念碑・記憶』ミネルヴァ書房 2010年
- ・谷村志穂著『ききりんご紀行』集英社 2016年
- ・ウォルター・アイザックソン著『スティーブ・ジョブズ』講談社 2011年

※「ニュートンのリンゴ」の画像は横浜市こども植物園に提供していただきました。その他の画像はすべてパブリックドメインです。